

えていられることだけは判った。

おひるになって、街のレストランに揃って出かけた。私が、ザンストラという名前から想像して、インドかインドネシアから来た学者かと思っていましたと無知なことを言うと、お前のところの「ナンバ」という名前は「ザンバ」とよく似ているのですぐ覚えたと答えられた。難波君には気の毒なような話である。昔の話もいろいろ出たが、その中で先生は、私の電子温度の研究が戦中戦後のドサクサで埋れてしまったのは気の毒であったとってなぐさめ、かつ激励して下さいました。私自身、近頃は惑星のことで頭が一杯で、古い事は忘れていたが、昔を思い出し、先生が知っていて下さった事を何よりも光栄に思った。食事を終って別れるとき、クールブルドさんをおしとめて、自分で支払をして下さったことも有難く、忘れられない思い出になった。

哲学の論文の別刷を送っていただくたびに、判らないながらも先生の御健在を思い、安心していたのであるが、今年の夏いただいた別刷の封筒の字が少しふるえていたので気になっていた。



第2図 先生の郷里デルフトの街の風景

先生の亡くなられた第一報はクールブルドさんから、続いてユトレヒトの難波君から詳しい手紙がとどいた。心臓マヒで突然亡くなられたため、翌日まで誰も気がつかなかったそうである。先年ミネルト先生が逝かれ、今またザンストラ先生が亡くなられた。お二人とも真に天才的なオランダの巨星であった。天文学者の場合、巨星は地におちるのではなく、天に昇るのである。

## 雑報

### 新・小島彗星 (1972j) の発見

愛知県一色町の小島信久氏は、1972年11月1日4時02分から4時20分(日本時)まで、ジャコビニ・ジンナー彗星(1972d)の観測のために撮影した乾板上に別の移動する彗星状の星像を発見し、11月1日23時ごろ東京天文台に連絡された。東京天文台では、直ちに確認のための手配をしたが、高知市の関勉氏が同じ星野をほとんど同時刻に撮影されていて、小島氏からの依頼で乾板を精しく調べ指摘の場所にその星像を確認されていることを知った。翌11月2日朝の小島氏の写真観測によって移

動が確認されたので、東京天文台では I.A.U. の天文電報中央局へ、新・小島彗星として連絡した。中央局からは、小島彗星として登録されたことを示す電報が折返えしとどけられた。東京天文台堂平観測所でも2日朝撮影したペーカールカメラのフィルム上で、約12等のこの彗星を確認した。その後関氏から別記のような精測位置の連絡を頂いた。小島氏の発見時刻と発見位置は下記の通りで、使用望遠鏡は口径31.5cm、焦点距離151cmの写真用反射鏡である。なおこの彗星は小島氏にとっては、1970年12月28日に発見された周期5.9年の周期彗星(1970r)に次いで2個目にあたり、いずれも光度14等でアマチュアの発見としては記録的に暗いものである。

新・小島彗星は1972年中で通算10個目にあたり、日本人の発見した彗星としては、1971年3月7日の鳥羽彗星(1971a)以来1年8カ月目、通算32個目である。

#### 小島氏の観測

U.T.	$\alpha$ (1950.0)	$\delta$ (1950.0)	$m_1$	$m_2$
1972年10月31.79931	08 <sup>h</sup> 23.4 <sup>m</sup>	-18°52'	14	15
11月1.73958	08 22.1	-19 02	14	15

#### 関氏の観測

U.T.	$\alpha$ (1950.0)	$\delta$ (1950.0)	$m_1$	$m_2$
1972年10月31.84166	08 <sup>h</sup> 23 <sup>m</sup> 21 <sup>s</sup> .6	-18°52'23"	13.5	15
11月1.80278	08 22 07 .04	-19 02 29.7	13.5	15
11月1.81667	08 22 05 .95	-19 02 38.7	13.5	15

(香西洋樹)